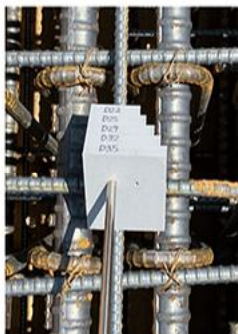


「設計者としての22年間」

千田 芳治



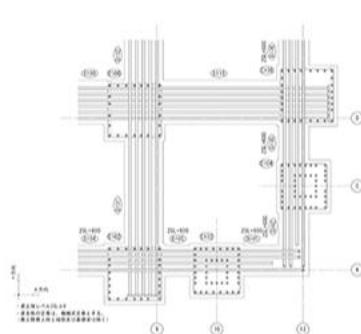
配筋検査ブロック



かぶり厚チェック



鉄筋空きチェック



平面配筋詳細図

大学を卒業したのは、いわゆる就職氷河期の真っただ中であった。なかなか就職先が見つからず、数カ月後、教授の紹介で構造設計事務所にアルバイトとして入ることになった。

人数が少なく多忙な事務所だったため、CADのマニュアルを渡され、参考図を見ながら、独学で操作を覚えていった。ひたすら図面を描く毎日だったのを今でも覚えている。「今日は今日中に帰ろう」と上司に言われたことが、今となっては懐かしい思い出である。複数の計算担当者の指示により多くの図面を描くことによって、計算を行わずとも部材断面を推定する能力を身に付けることができ、今の自分があるのは、この時代の経験が土台になっていると感じている。しかし、（あるいは、ただ、）今の時代には、あの働き方を若い人にはあまり勧められない。

少しずつ図面が描けるようになると、意匠設計者との打ち合わせを担当するようになった。意匠の意図を正確に読み取り、それを構造設計者としてどのように成立させるかとい

う考える力が、少しずつ身につけていった。

あるとき、社長が言った。「建物は計算書を見て建てるわけじゃない。図面が大事なんだ」

その言葉は、今でも自分の中に残っていて、設計者としての根幹をなしている。

ある物件では、車路スロープの構造設計を任された。自分なりに条件を整理し、応力解析を行って設計したが、その前に別の建物でスロープが崩壊する事故が起きていた。元請けからは「本当に大丈夫か」と念を押され、想定外の条件を追加して設計することになった。あの経験は、机上の計算だけでなく、社会的な要請や安全に対する意識を含めた「色々な考え方」が設計を形作ることを痛感させ、大きな勉強になった。

工事監理にも関わるようになると、図面上では可能に見えた納まりが、実際の施工現場ではいかに困難であるかを痛感した。こうした現場での気づきが、配筋詳細図の作成や設計の考え方にも大きな影響を与えてく

れた。

19年間勤めた設計事務所を退職し、現在は施工会社に所属している。設計施工案件では、設計意図が現場に正確に伝わり、現場からの質疑ゼロを目標に図面づくりを心がけているが、まだまだ道半ばである。最近では、かぶり厚や鉄筋間隔のチェック用に3Dプリンターでブロックを自作したり、構造設計に生成AIやBIMを活用したりと、時代に遅れないように意識して日々試行錯誤を重ねている。

これからも、これまでの経験を活かし、現場と設計の橋渡し役として、少しでも建築業界に役に立てるように、挑戦を続けていきたい。

（次回は徳留裕敏氏）

（ちだ・よしはる）

1980年生まれ 北海道出身 2003年北海道大学工学部建築学科卒業 現在、砂子組建築部建築設計室設計一級建築士 趣味はマラソン

